

# 知っておきたい がん医療

# 最前線

静岡がんセンター公開講座2021「知っておきたいがん医療最前線」(静岡新聞社・静岡放送主催、県立静岡がんセンター、三島市、長泉町、裾野市、函南町、清水町、三島市民文化会館共催、スルガ銀行特別協賛)の第1回配信(事前登録制)がこのほど行われました。第1回は県立静岡がんセンターの山口建総長が「がん医療最前線～治し、支えるために～」後藤幹生県健康福祉部参事が「新型コロナの最新の話」と題し、それぞれインターネットを通じて講演しました。その概要をまとめました。

(企画・制作/静岡新聞社地域ビジネス推進局)



主催/静岡新聞社・静岡放送 共催/県立静岡がんセンター、三島市、長泉町、裾野市、函南町、清水町、三島市民文化会館 特別協賛/スルガ銀行

## 新型コロナの最新の話

**新型コロナの特徴と感染対策**  
新型コロナウィルスは直径約1万分の1ミリの球形で、表面の多くの突起物で王冠(コロナ)のような形です。二重の脂の膜に包まれ、中には遺伝情報RNAが入っています。実はコロナウィルスは「7人兄弟」で、長男から4男までは、いわゆる風邪のウィルスです。5番目は20年前に流行したSARSコロナウィルス、6番目はMERSコロナウィルスです。そして7番目が新型コロナウィルスです。世界で約2.5億人が感染し、約500万人が亡くなっています。次々と変異株が発生し、最近の第5波のデルタ株では、感染力が一段と上昇しました。コロナウィルスの感染経路は、飛沫感染、接触感染、エアロゾル(空気中を漂う小さな

な飛沫)感染です。対策として、感染源対策は、変異株を国内へ入れない水際作戦、感染者の早期隔離、濃厚接触者の自宅待機のほか、抗ウイルス薬の投与が挙げられます。感染経路対策は、他人との距離2m確保、会話や歌唱の際は必ずマスク装着。換気、手洗いや手指消毒も重要です。感染宿主対策は、ワクチン接種が最重要ですが、適切な基礎疾患管理、睡眠・栄養も大切です。

### 症状と治療、ワクチン

コロナウィルスは感染後、約5日間潜伏して発症しますが、発症2日前からすでにウィルスを放出しています。発症後3、4日でウィルスは減り、8、10日で感染力はなくなります。ワクチン未接種感染者の8割は軽症ですが、残り2割は肺炎を起

す中等症、さらにそこから数%が重症化します。感染直後なら、増殖を抑える抗ウイルス薬、肺炎が生じたら抗炎症薬が使われます。最近では中和抗体のロナプリーブなど、軽症時に投与して重症化を抑える点滴薬も出てきました。さらに国内でも治験が進み、モルヌピラビルという内服薬も期待されています。

### 今後の対策は総力医療体制

8月の第5波は、感染者数が予想以上に爆発的に増えました。同時に、保健所や医療機関の担当者の不足や疲弊から、保健機能が低下し、病院の増床、宿泊ホテルの医療強化も難しく、自宅療養者が4000人台に達しました。これらを課題に、県では今後の対応を進めています。まず、ワクチンの接種率向上による感



静岡県健康福祉部 参事 後藤 幹生 氏

ごとう みきお 後藤 幹生 氏  
1989年京都大学医学部卒。91年静岡県立総合病院、97年市立島田市民病院等の小児科医を経て、2011年静岡県に入庁。12年富士保健所長、14年熱海保健所長、17年健康福祉部疾病対策課長、21年より現職。日本小児科学会認定専門医、日本医師会認定産業医。

## がん医療最前線 ～治し、支えるために～



県立静岡がんセンター 総長 山口 建 氏

1974年慶応大医学部卒。99年国立がんセンター(現国立がん研究センター)研究所副所長。2002年から現職。18年より厚労省がん対策推進協議会会長を務める。研究領域は乳がん治療、腫瘍マーカー、ゲノム医療、がんの社会学。

**ゲノムが傷つきがん化**  
20世紀後半からがん医療は大きく進歩しました。その一つががん本態の解明です。人体を構成する約40兆個もの細胞の核には、ゲノムという遺伝情報が含まれています。このゲノムの特定の部位が傷つくとがん化する

事です。家族の半数ががんにかかること、皆、がん家系と心配します。しかし、超高齢社会では2人に1人ががんに罹患(りか)ん)するので、半数ががんにかかってもがん家系とは言えません。ただし、がん全体の1、2%とまれですが、確かに遺伝するがんは存在します。こうした遺伝性がんでは、家族が皆、珍しいがんにかかり、20、40代という若いうちに発症するという特徴があります。現在、数十種類が知られており、遺伝子診断で、ほぼ確実に診断可能で、治療法も進んでいます。

### 予防・検診・日常診療

がんを防ぐ三つのポイント「予防・がん検診・日常診療」について紹介します。予防とはゲノムを守ること。前述の発がん物質や放射線は避けます。食

### 個別化医療と全人的医療

がんの診断・治療技術は年々進歩しています。手術分野では、早期に発見されたがんを対象とした、負担の少ない低侵襲性手術が主流となっています。放射線治療分野ではピンポイント照射が広く行われ、薬物治療についても、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害剤といった新薬が登場しました。これらを駆使して、個々の患者さんにぴったりに合った個別化医療が始まっています。

患者さんや医療スタッフのがんと向き合う姿勢も大きく変わりました。大多数のがん患者さんは告知を受け、医師はインフォームドコンセントにより患者さんに最善の治療方針を説明し、治療実施の同意を得、必要に応じて、セカンドオピニオンを勧めます。静岡がんセンターは、がんの症例数は、全国トップスリーを占め、個別化医療などの先端的医療を推進しています。しかし、現状では、がんの6割は治せても、4割の患者さんの命を救うことができません。そこで、治る患者さんとはもとより、治せない患者さんに対しても、ケアを重視した全人的医療を目指しています。これは、「がん病巣」を治すだけでなく、患

**【事前登録申し込み方法】** 問い合わせ: TEL 055(962)6520  
①郵便番号・住所②氏名③生年月日(西暦)④年齢⑤性別⑥職業(学校名)⑦電話番号⑧FAX番号⑨メールアドレス⑩視聴方法(パソコン、スマホなど)を明記し、下記の静岡新聞社・静岡放送 東部総局にお申し込みください。1回だけの受講も可。  
<はがき> 〒410-8560 (住所不要) 静岡新聞社・静岡放送 東部総局「静岡がんセンター公開講座」係  
<FAX> 055-962-6752 <Eメール> toubugyoumu@shizuokaonline.com ※FAXとEメールは件名に「静岡がんセンター公開講座」と記してください。  
次回の配信は11月13日(土)予定です。